
ゼンマイ仕掛ケノ人間達

神柎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼンマイ仕掛ケノ人間達

【Nコード】

N9579X

【作者名】

神柎

【あらすじ】

人間の魂には

一人一人ゼンマイがついている

「ゼンマイは人を表す」

「ゼンマイが止まれば人も止まる」

ゼンマイの見える？稀と

変わり者達の物語

一巻目？稀

私は変わっているらしい

「変な奴だ」とよく言われる

自覚はしているのだが、

納得はできていない

だって

あの「ゼンマイ」が見えるのは

私だけだから

平凡な高等学校

平べったい毎日の「コマ

夏休みとやらの前日のこと

真夏の白い太陽の下で、
クーラーのない教室の中にぐっすり寝ている高2が一人……

「おい赤月！寝るな」

世界史の教師が怒鳴る

「うーん？」

(眠いんだから仕方ないでしょーが)
心の中で文句を言いつつも
のたのたと体を起こす。

彼女の名は

「赤月　？稀」

ユウキなどという男のような名前のせいなのだろうか？

炎天下の中ぐっすり寝られる凶太い神経と、

荒っぽい性格を持っているゴーイングマイウェイな少女だ。

だが成績の総合得点では学年トップ5に毎回必ず入っている、何故だ
まあ簡単に言うと

『性格は馬鹿だが脳みそはある』といった感じだ。

「いい加減にしる全く」

「ほーいほい」

「単位減らすぞ」

2年に進級し早四ヶ月、先生方もそろそろ彼女(の扱い)に慣れて
きたようだった。

一方、

そんな人達のことも考えず

?稀は別なことを考えていた。

(今日の晩飯何にしようかな?)

呆れるしかない奴である。(ちなみに？稀は一人暮らしだ)

だが、周りの人間は知らない

彼女の瞳に映る「物」を

見えていないのだから

どんなに見たいと思っても

決して見られる物では

無いのだから・・・

「巻目 ？ 稀（後書き）」

気まぐれ作品です

どうぞよろしくお願いします。

W
W
W

二巻目 変わり者

「あー帰りたくない」

学校の帰り道でそんなことを呟く？稀
そんな彼女の前をホコリがふわふわ通る
帰り道と言っても、自分の家のドアの前・・・

鍵を取り出し、

鍵穴に差し込み

カチャと開けた

はずなのだが・・・
開いている

ハアとため息をつきドアノブを回し、

ドアを開けた途端

「ユウーーーーーっ！！！！」

というめちゃくちゃデッカイ声と共に、
少女が抱きついてきた。

首が絞まる

「杏・・・イタイ、放して、死ぬ」

杏と呼ばれた少女は「ありゃりゃゴメンゴメン」と首に巻きつけて

いた腕を解く

「鍵掛けてあったのになんで開けちゃうわけ？」

「そりゃあ開くから開けたんだよ」

「理由になってない」

「どうしてそうなるんだ。」

「どうしてそう思うんだ。」

「でもひどいよーあたしが家にいるって分かった途端に『帰りたくない』って言ってるし」

「何で聞こえてんの？」

「ハハハツ 寒いだろうし上がりなよー」

「そこはあたしの家だ」

少女は

射済 杏

薄茶色のショートカットで大きな目が愛らしい

陸上部の部長で様々な大会に出ているスポーツ人間。

？稀と杏は小学生からずっと一緒に、

いわゆる幼なじみという関係だ。

天然で誰とでもなじめる性格の杏は、男子にもかなりモテモテなた

め・・・

敵が多い。

「そーいえばさー」

人の家で勝手にお茶を入れながら杏は話し始める。

「何？」

「また出たらしいよー」

「強盗？」

「違うよ『死神』の連中だよー何かやるうとしてるってー」

『死神』

その言葉に？稀は顔をしかめる。

「どっから聞いた？」

「えっへん！勿論『死神』の連中からだよー」

「要するに盗み聞きしたってことか」

杏の聴力は半端ではない

100メートル先の内緒話もうるさいとのことだ、

人混みにはなるべく入らないようにしているそうだ。

「で何かって？」

「それは言わずともよく分かってるでしょー」

「・・・うん」

『死神』というのは多分人ではない

人間を殺し、魂を取る・・・いや『刈る』

？稀と杏はその現場を見た。

大きなギロチンの刃を持った少女が

人間に向かって刃を振り下ろした、

そして

人間の魂を見た。

いびつな深紅の塊だった。

そのとき？稀は気がついた

魂に小さなゼンマイがついているのを・・・

『死神』はそれを持つと

こちらを見て

「あら、こんにちは私死神と申します以後お見知りおきを」
そう一言だけいうと

霧のように消えていったのだった。

それからだった、？稀は日常で魂がみられるようになった。

ゼンマイ仕掛けの魂がみられるようになってしまった。

杏はそんなこと無いらしいが耳が異常なまでに良くなったそうだ

しかし、ゼンマイの話杏に話しても

「そんなの無かったよ、魂ってきれいなまん丸だったもん」と言う。

だが、二人して「変わり者」になってしまったというのは事実であった。

二巻目 変わり者(後書き)

うへー

べたべたですな。

あと、

キャラの名前は

アカツキ ユウキ

と、

イズミ アンス

です。

三巻目 平和の終わり

「死ね」

そう言っつて黒い死神は

大剣を・・・

「杏、そろそろ帰んなよ」

一瞬静かになった部屋に？稀の音が響く

杏は

「えーじゃあ寂しいしユウ一緒についてきてよー」

文句をぶつぶつ言って

口を尖らせる杏

「何でだよ」

「いーじゃん別に」

と？稀の腕を引っ張る

「ヒマでしょ？」

「・・・」

そう言われると・・・

ヒマだ

「分かったよ」

毎度結局折れてしまう。

あーあ甘いなあー

・・・と、いうことがあり

？稀は杏の付き添いをする事になった。

杏の家はメツチャ近いが・・・

しばらく、歩いたとき声がかかった

「あっお姉ちゃん！？稀ちゃん」

「雪奈？なんでここにいるの？」
声の主は杏の妹、雪奈だった。

杏には双子の妹がいる

姉は相梨

妹は雪奈という。

二人とも姉に似て運動神経がメチャクチャ良い。

(そして喧嘩っ早い)

「いや、相梨と喧嘩してさー家に入れてくれないんだよね」

「やっぱりか」

呆れ顔の杏

これはある意味夏の風物詩である。

「あんた達兄弟はいつまで経っても変わらないね」

「そうかな？」

八毛る二人

「それはそうとお姉ちゃん鍵持ってるでしょ？」

「・・・」

「お姉ちゃん？」

「・・・なくしたらしいねこのアホは」

ニヤッと笑う？稀

「もー頼れないんだから、先いつてるよ」

そう言っ駆け出す雪奈

ゾワツと嫌な予感がした

寒気と言うより悪寒がしたという感覚だ。

それを感じた途端、？稀は自然と叫んでいた。

「雪奈っ！走れ！」

「？」

何を言っているんだ？とでも言いたそうな顔で雪奈が振り返る。

「ユウ？どうしてそんなこと・・・」
杏もげげんな顔した・・・その時

ガリ・・・と地面を削るような音が聞こえ
振り返った雪奈の後ろに漆黒の影がスツと現れた。

？稀の顔が青くなる

杏は・・・いなかった、いや、目にも留まらぬ早さで走っている。
妹の元へ

そして雪奈の腕を引っ張って駆け出した。

雪奈も杏の腕を強く握る。

だが、影も速かった

あっという間に杏に追いついてきた

「っ！お姉ちゃん！」

雪奈が叫んで姉の手を放す。

「雪奈！？」

雪奈はそこから飛び退いて地面に転がる・・・そして
ガインツ

と地面に何かが当たる音

そのとき

？稀の目がとらえたのは・・・

黒いマントを身につけた大男だった

手には大きな剣を持っている。

男は？稀を見て笑った、そして・・・

「お前達には俺が見えるのか」
と言葉を発すると

雪奈に向けて

こう言った

「俺は死神、ということだ」

「死ね」

三巻目 平和の終わり（後書き）

イミフメイ

しばらく更新できないかもぞよ

四巻目 死神

目の前で何がおこっているの？

この黒い奴は何？

なんで雪奈に剣を向けるの？

雪奈が何をしたの？

あたしの妹に何を・・・

耐えきれなくて目を閉じた

黒い赤色が

見えた気がした

どのくらいの時間が経ったのだろうか・・・
目を開いても黒々としたアスファルトが見えるだけだった。

雪奈の目の前で刃は止まっている

否、止められている

黒い、制服のような服を着ている少年が、大きな鎌で大剣を止めている。

少年の隣には黒髪で、少年と同じ制服姿の少女がいた。

？稀達と同一年に見える

「危ねえなー、何やってんだよお前」

静かな市街地にだるそうな声が響いた。

多分少年の声だろう。

「え……なに？」

杏は目が皿になっていて、
驚きすぎたのか雪奈の顔は凄い。

「っ！お前邪魔を・・・」

「悪神ガルド・ラーベス、規定違反及びその他諸々で連行します。
デスサイズを捨てなさい。」

少女が冷ややかに言う。

いつの間にか杏が？稀の隣にいた。

「・・・あれ誰？？稀の知り合い？」

「いくらあたしでもあんなに有害そうな知り合いはいないから
鎌持ってるし・・・」

「・・・ちっ」

「あっ！おい待てよっ！」

その声に振り向くと大男はいなくなり

啞然としている雪奈と、なんかよく分からん二人組がいた。

杏は雪奈に駆け寄り

「怪我ない？大丈夫？」

と、声を掛けているが

返事がない、ただの気絶のようだ。

「・・・何この風景」

あの二人組・・・

そして、あの鎌・・・

顔色が悪くなつたのが自分でも分かった。

「えーと」

とりあえず・・・

「あの・・・あなた達誰？」

二人組は驚いたように顔を見合わせると声を揃えて

「え、見えるのっ！？」

・・・ハイ？何が？

「え、何のこと……?」
と聞くと

「いや」

と少年は頭を掻いて困っている。

少女は

「私達は普通なら人間には見えない筈なのよ……なのに……」
と言った。

見えない?

それを聞いた途端いろんな質問が頭の中を駆けめぐった。

「それってどういうこと? ツーか、さっきの大男は? あんた達は一体何なの? あと、あんた達のた……」

「ストオーツプ!」

大声で少年が制止した。

「んな矢継ぎ早に質問されても俺たちは困るんだよ……」

「あ……ゴメンナサイ」

暴走してた……恥ずい……

「ユウ?」

また、いつの間にか杏が隣にいた。

瞬間移動でも出来るのか、こいつは……?

「この人達は?」

杏の、この一言で二人が固まった。

「ええっ? 見えるのっ!？」

「二回も言わんでいいっ!」

杏はきよとんとしていた。

状況が飲み込めない……

その時ふと思いついた

「あ、雪奈は?」

杏は

「さっき家に送ったよ、相梨も反省してたみたいでよかった」
杏が笑って言う

なんか空気が和やかに・・・

「あの・・・」

きまりわるそうに少年が口を開く

「あの大男に襲われた経緯を、教えてくれないかな」

四巻目 死神（後書き）

久しぶりの更新です。
結構たくさん書けた・・・かな
新キャラです。

五巻目 二人の神

？稀の家は少しボロいアパートの2階小さい地味な部屋で、机とパソコンくらいしか物が無い

杏は『もつといろいろ置けばいいのにー』と家に来るたびに言う、そんなことを言われても掃除の苦手な私は何かを置くと三日で家が凄いいことになるのだ・・・
物（pc以外）を置く気になんぞなれるわけがない。

「上がってよ何にもないけど」

杏と二人組を案内してお茶を入れ（何も無いとは言っても食器などはしっかりしている。）

とりあえずみんなで机を囲む、そして少年がしゃべり始めた。

「じゃあ君達があいつに何で襲われたのか教えてく・・・」

「・・・待つて、まずあんた達がどんな人であるのかは一体何なのかを説明して」

杏が少年に声を掛ける。

こいつは何かと行動力があって助かる。

隣の少女が少年を見て大仰にため息を吐く

「私は明宮紗織、死神という仕事をしているの」

「し、死神!？」

「ユウこれって・・・」

死神ってあの犬男も・・・

「何か知っているの？」

「みたいだね・・・」

置いてけぼりを食らっていた少年が言った。

「俺は大部翔也って言うんだ。紗織と同じ死神・・・って死神ってというのがどういう物なのかよく知らないと思うけど・・・」

「『ゼンマイ』を刈る人？」

ボソツと呟いた疑問に翔也と呼ばれた少年が反応した。

「！」

少年の気楽そうな笑顔がみるみるうちに消えていった。

「違いますか？」

「君は一体何なんだい？何で『ゼンマイ』を知っている？まさか見えるのかよ？」

急に翔也の目が冷たさを帯び、寒気がした。

杏も困ったような、緊張しているような顔をしている。

その時、じつと翔也をにらんでいた紗織が・・・

翔也を殴った

グーで・・・

「い、痛い・・・マジで」

紗織は呆れたように床に伏せる翔也から目線をずらし、またため息を吐いた。

「ごめんこいつ馬鹿だから」

「・・・そーでしたか

杏が不思議そうに口を開いた。

「えーと、死神ってそこら辺の人を殺しまくる通り魔みたいなものなじゃ無いの？あなた達の会話をあたし盗み聞きしてて・・・」

さつき話してた死神ってこの方々だったんだ・・・

それに

確かにその質問は自分も聞きたかった。

あの犬男や、あの目見た死神を名乗るギロチン女・・・

奴らと目の前にいる彼らが同じ物とは思えなかったからだ。

「違うわ、私達は人を殺している訳じゃない」

「え？それってどういうこと・・・」

「ユウ・・・って言うの？彼女・・・」

「いや、？稀だから！」

コウと呼ぶのは杏ぐらいだ

「？稀・・・なの？」

紗織とやらの話をまとめると死神というのは、今まで自分達の考え
ていた物とはずいぶん違う
良い人種なようだった。

「私達の仕事は死人の身体から身体の動力源である魂を分離させて
その魂を核にして新しく人間を創ること。あなたがさっき『ゼンマ
イ』を刈るって言ってたでしょ？『ゼンマイ』って言うのは身体と
魂を繋ぐ物で、言うなれば・・・そうね身体は人形、ゼンマイはコ
ード、魂は電池と言うところかしら？」

「じゃあ人はどうして死ぬの？魂を繰り返して使えるなら死ぬなんて
こと・・・」

「いや、人が死ぬのは電池切れのせいじゃない」
頭を押さえながら翔也が言う。

「人が死ぬのは、身体に取り返しの付かないような傷がついてゼン
マイが壊れたり、長く生きてゼンマイに負荷が掛かって壊れたり・
・普通の人間には『ゼンマイ』は見えない筈んだけどさ、コード
がショートしてしまつたら人形は動かないだろ？その人形から電池
を取り出して新しいコードを用意して人間を創る、OK？」

「OK！」

杏はいつからオカルトが好きになったのか興味津々だった。

「・・・人形ねえ」

うさんくせー

めんどくせー

そんなことを心の中で連呼しながら話を聞く

「じゃあさっきの大男は？あいつ自分のことを死神って言ってたけ
ど」

「・・・え？嘘お！」

「本当だよ」

『俺は死神、ということだ』
『死ね』

まだあの言葉が耳に残っている。

「うーんあいつはね・・・悪神だよ、悪い神」
翔也が顔を険しくさせ、紗織が眉をひそめる。

「悪神って?」

杏が聞く

全く、面倒なことに首を突っ込むのが好きな奴だ・・・
毒気を抜かれる。

「悪神は何らかの原因が元で、人殺しを始めてしまった死神なんだ。
奴らが何をしようとしているのか気になって調べていたら、君達が都合よく襲われていたんだよ」

「都合良すぎだろ!」

「あはは」

「おい杏笑うな!」

あの子も悪神・・・

そう紗織は呟いた声は小さく誰にも聞こえていなかった。

五巻目 二人の神（後書き）

ハイ名前紹介

アケミヤ サオリと

オオベ ショウヤです

主要な方々なので今後ともよろしく。

六巻目 物語の始まり

今日、本日、夕暮れ時に

謎の大男に襲われました。

謎の二人に助けられました。

二人を家に招きました。

話を聞きました。

死神を知りました。

・・・。

そこまでは良いんです、良いんですよ？

でも・・・

「刃物はダメだろ刃物はっ！」

「えー」しばらく話す間に、死神の二人組、紗織と翔也とはだいぶうち解けた。

まあ助けてもらったし・・・

しかし！鎌を持ち込むのはできる限りやめてもらいたい
だって怖いし・・・

なのに

「仕方ないじゃん、これないと俺死ぬし」

「死ぬ？」

「うん、死ぬ、俺のこの鎌は『デスサイズ』って言って、死人の身体と魂を分ける道具なんだ。」

「ちなみに、コードはしつかりしてる『デスサイズ』は私達の電池なの・・・無くしたりしたら死ぬから」

「道理で魂が見えなかったわけだ・・・」

「やっぱり見えるんだ君」

「・・・」

とのことで家に刃物が入るのを許可せざるおえなくなってしまった。人外の方々をうちに入れた時点でアウトだったんだろうな・・・失敗した。

その時杏が思いついたように・・・と言うかおもいだしたように二人に聞いた。

「そういえばさー二人は私達には見えるのになんで他の人たちには見えないの？」

・・・忘れていた

「うーん、

分かんない」

二人の回答は分からないでした。

「私達も何でも知ってるわけじゃないの」

「そっかー残念」

知りたかったんだけど・・・

「じゃあ、話を戻そうか、君達は何であいつに襲われたんだ？」

「あたしが知るかアホ」

こっちが聞きたいわアホ

「ん？ねえ杏そういえばあいつって雪奈を狙ってなかった？」

「セツナ？誰だいそれ？」

「あたしの妹だよー」
「杏ちゃんの・・・」
「ちゃん付けやめい」
「あ、それはあたしも」
「んじゃ？稀さんと杏ぴよんでOK？」
「・・・その鎌であんたのこと切っちゃだめかなあ？」
貴様を見ていると殺意が湧いてくるんですが
マジ殺して良いか？
「・・・怖い顔するなよ、冗談だからさーwww」
「ああ言う冗談を言う奴は馬鹿 馬鹿は死ななきゃ直らない 死ね」
「？稀も杏も熱くならなくても大丈夫よ、私が殺しておくわ」
「・・・いや紗織止めよう？」
【お願いしまーす】 杏とハモツた。

惨殺シーン中

「それで、杏の妹さん・・・雪奈ちゃんが狙われた理由は不明なの
ね」
「それこそ私達が聞きたいし」
「あともう一つ聞きたいことがあるのだけれど、良い？」
「いーよ」
杏がなんか眠そうだ、面倒な話嫌いなのに首突っ込むからこうなる。
・・・
「あなた達の能力はどんな物なのか、何処で身につけたのか、さっ
きから気になっていて・・・」
うーん
どんな物かは分かりきっているが、何処で身につけたのかはよく分
からない・・・言うならば

「あたしの能力は分かっているとと思うけれど人間の・・・それ以外も
だけど、魂を見ることが出来る」

「うちは異常なまでに耳が良いんだ」

「分かったわ、で、何処で、何故、その力を身につけたの？」

「何故が追加されていると思ったのは気のせい？」

「さあ？気のせいじゃないのかしら？」

「・・・あっそ、何処でっていうのはよく分かんない。でも、時期
的には「初めて死神を見た時」なのかなあ？・・・ん？もしかして
あのギロチン女って悪神か？」

「！」

「そうかもね、ユウ、だって初めて見たあの死神は歩いている人の
魂刈ってたもん」

「そう・・・なの・・・」

「?・・・どうかしたの？」

「いいえ・・・別に、それよりその時刈り取られた魂が、あなた達
には見えたの？」

「うん、ってことはやっぱりあの時からなのかー能力に「目覚めた」
?って言うのかな？」

「「目覚めた」、で合っていると思うわ。人間は誰もが全員・・・
と言うわけではないけれど何人も始めから能力を備えているものだ
から」

「目覚めない人もいるの？」

「いるわ、と言うか目覚めない人間の方が多いわね」

「そうなの？」

「いうことは私達には運という物が無いと言うことか・・・トホホ
「目覚める理屈は私達にも分からないわね」

「・・・ふーん」

「あなた達これからどうするの？こんな魑魅魍魎と関わってしまっ
た以上確実に何か良くないことに巻き込まれるわよ？」

「巻きこんだのはあんた達じゃ・・・」

そう言うと紗織（さん？）はクスツと笑い・・・っーか可愛い笑い方も出来るんだなあ

「巻きこまれる運命だったんじゃないの？」

「嫌な運命だな、どうするって言われてもねえどうもしないし・・・杏？」

「あいつがまた襲ってくる可能性はある？」

「・・・90%（うう・・・痛え）」

「90パー！？マジで？つか起きたんだ？」

「紗織も君達も酷いなあー」

翔也はタフだなあ

「・・・後でこいつにもう一発お願い」

「了解」

「了解すんなよ！て言うかまだ、あちこち痛いんだけど！」

そりゃそうだ、あんなにフルぼっこにされてたし・・・アザ残ってるし・・・

「？あ、翔也起きたんだねーさっきなんか言ってたよね？あしこし痛いとか・・・」

「俺はそんなに年寄りじゃねえよ！」

「そして杏は気付くの遅いよ」

そう言うと杏は顔を曇らせて言った。

「90%・・・だよね」

「！」

「杏・・・」

不謹慎だったと後悔した。

あいつは魂を刈るんだ、魂を刈られるというのは

『死ぬ』ということなんだ・・・

「ユウどうしよう、雪奈が・・・」

いつも明るい杏の瞳に涙が浮かんでいた。

手も震えている

喧嘩をよくすると言ってても杏にとっては大切な妹なのだ。

「どうしよう・・・守らなきゃ・・・雪奈を守らなきゃ」

でも自分に出れることは今は何も無い、紗織や翔也のようにあたしは強くない

手を握ることくらいしか・・・出来ないでも

「守るよ、雪奈がいなくなるのは嫌だし、悲しむ杏を見るのも嫌だから」

「ヒュー良い友情だねボあつ！」

「翔也黙れ」

翔也の頬にすっげえアザが・・・

「・・・守るわ、私達も力を尽くして」

「え？どうして」

「あたしと翔也は死神の中でも実力のある方だし、あと」

「あと？」

「あなた達って面白いなーって思ったのよ、あなた達の友達になりたいなって」

「んぐ、痛ててて・・・紗織本気か？俺は別に構わねえけど・・・」

「本気よ？運命と言っても私達が巻きこんだには違いない、なら私達があなた達を助けるべきでしょう？」

「人間の友達ねえ・・・良いと思うぜ？」

「・・・死神の・・・友達」

「いいの？本当に？」

「だから良いって言ってるじゃない、私のことは紗織でいいわ」

「俺のことも『あんた』って呼ぶの止めるな、あと『アホ』も止める翔也でよろしく」

あたしと杏は顔を見合わせたそして・・・

「じゃあ」

【一人ともこれからよろしく】

【1515151515】

六巻目 物語の始まり（後書き）

いえあつ

一章完でさあ

【】は八モリの時使ってマス

友人の突っ込み

「一巻目とかつてカンって読むの？」

すいませんアレは

ヒトマキメです・・・

二巻目は

フタマキメ・・・

紛らわしくってすいません

最近気付いたこと

・・・あれ、なんかだんだん本編の文字数増えてないか？

一巻目 始めの一日

「おいおい・・・勘弁してくれよ・・・」

暗闇の町の中

大きなカバンをぶら下げた少年が苦笑いを浮かべて後ずさっている。少年の前には生氣のない目をした少女が微笑みながら立っている。

「お前は元々死神だろう？ いい加減に・・・」

少年がそこまで言った時、恐ろしく怖く微笑む少女は

「あなた達がいるからいけないの、あなた達がいなければ私は幸せだったのに・・・」

そう言い

持っていたギロチンの刃を少年に向けて振り下ろした。

夜

？ 稀の家の前で・・・
アパート

「じゃあ今日はいろいろ聞かせてくれてありがとな」

あの後、死神の二人と少し雑談をして、

杏は両親に「今日はユウの家に泊まるね」といつの間にか連絡してて家はいつも以上にうるさくて賑やかだった。

でも、二人もいろいろ急がしい身のようなので帰ることになった。

「うん、じゃあまた今度」

「気をつけてね・・・奴らはいつ来るか分からないから」

「うちも雪奈と相梨を出来る限り守るよ、妹だし」

「頑張れな」

そう会話して二人は夜の闇に溶けるように消えていった。

「よし、ユウっ！家人って枕投げしよう！」

「なんでだよ」

とまあ枕投げは運動神経の良い杏の圧勝で

今日は夏休み前だっつーのに凄く疲れた。

翌朝夏休み一日目 布団を干そうとしたとき・・・

「え？」

・・・これは何でしょう？

ベランダの布団干す所にぶら下がっていると云うか引つかかっているこの物体

どっからどう見ても

金髪人間のハエニエ・・・

「ぎゃああああああっ！」

「ど、どうしたのユウ!？」

叫び声を聞き今日家に泊まっていた杏が駆けってくる。

「どーしたもこーしたもあるかあっ!べ、ベランダに……」

「ん?何?」

そう言つて杏はベランダを覗く

「ひゃあ」

あたしの方に振り向いた杏の顔色は白かった。

「何あれ?金髪外国人のハエニエ?」

「人間ハエニエにするってどんな鳥だよ……っていうかうちの家

のベランダはハエニエが出来るような針つーか棘とかないよね!」

そう言つたときベランダから

「だ、誰か助け……」

「……」

「……」

【生きてたのっ!】

蚊の鳴くような声を出す布団状態の少年をとりあえず中に取り込

・入れる

息はしている、なんとか生きてはいるようだった。

怖っ!もう少しで殺人疑惑が掛かるところだった……

「いやーアリガトー死ぬかと思つてー」

「大丈夫?」

杏は誰とでも息が合うなーでも少しは警戒しろよ

心の中で突っ込み

「でも近所に見つかん無くてよかった……」

「あははそこは大丈夫俺人間に見えないし」

「へー凄いねー」

金髪少年と杏はニコニコ笑う

杏と似てるなこいつ……

ん?今なにか凄く聞いたばかりのセリフを聞いた気が……

「・・・ねえあんた死神？」

「え？君達もでしょ？」

「・・・。」

死神到来！しかも二日連続でっ！

近所の人に見つからなかった理由発覚！

「杏あたし頭痛いから病院いくわ・・・」

「現実逃避はやめなよ・・・」

「ええーっ！君達人間なの！？」

「気付くの遅っ！」

本当に杏か！

すると少年は

「この辺りでナイフ狂の美少女と鎌を持ったひねくれ者見なかった？」

「鎌を持ったひねくれ者は知ってる、おしとやかな美少女は見た」

紗織と翔也か

「何処にいる？」

「知るか！」

昨日会った時間いてなかったし

「紗織と翔也でしょ？」

「杏、初対面の怪しい奴に情報を与えるな」

「うわぁ・・・何であいつらと面識あるの？」

そりゃ一応

「友達だし」

「・・・。」

少年は絶句している

その時ドアがノックされた

「はい？」

「宅急便です」

「・・・。」

親戚もない自分に一体何処の何奴が物を送ってくるというんだ

ドアを開こうとしたが、ドアの方から開いた。

「ひゃっほー一日ぶりだなー」

「おはよう二人とも・・・あと何かいるけど」

「う、噂をすれば影っていうのはマジなのか!」

偶然の神様あたしは貴方を深く恨みます。

運の神様あたしは貴方を深く憎みます。

「うわっアル何やってんだよ」

「アル？」

「おー翔也、久しぶりだねー」

「知り合い？」

あーあ

家がどんどん賑やかになってく・・・

「こいつはアルシーノ・ディークルイタリアのローマ担当の死神なの、で、何か用？」

「うん主に紗織に用がある」

「なに？」

「・・・マリーちゃんに昨日の夕方、ローマで会ったよ」

マリー？誰だそれ

そんなことを考えているうちに紗織と翔也の顔がスーッと青ざめていく

「嘘・・・」

翔也にこっそり

「あの、マリーって一体・・・？」

と聞いてみたが・・・

「誰だって良いだろ」

何か言っではいけないことを言ってしまった、

そんな空気が静かに流れた

「・・・ごめん、悪かった、別に誰でもないんだ、ただ・・・それ

を紗織にだけは聞かないであげてくれ、頼むから」

「うん分かった」

気楽そうなの二人にも聞いてはいけないことがあるんだと思った。

空の青いこの夏に、これから一体何があるのかは誰にも分からなかった。

一巻目 始めの一日(後書き)

二章に入り

新キャラ・・・なんか新キャラばかり出してないか？

これからもよろしくお願いします。

二巻目 闇の中

突然だが

金髪ハエニエ、アルシーノことアルは相方に見放されたらしい

死神というのは大抵、二人一組で行動する、

魂を刈ると、その魂の中に溜め込まれている人間の記憶が見える・

・いや

見えてしまう、どんなに嫌でも《見えてしまう》のだ

「何で見えるの？」と聞くと「仮説だけど・・・」と、アルと翔也が教えてくれた。

魂には人間の思い出がため込まれる、魂はその人間が死んだ後に違う人間の魂として使われる。

死神の『デスサイズ』は溜め込まれた思い出を吸収する、

吸収された人間の思い出は『デスサイズ』を通して死神に送られてしまふ、目を閉じてもその思い出は頭の中ではつきりと見えてしまふ・・・

それを死神は 『走馬燈』 と呼ぶのだ。

新米の死神が初めて魂を刈った時、自分が人殺しをしたような気がしてしばらく立ち直れなくなる奴がとて多いとのこと・・・メンタルの弱い奴は錯乱してしまつて大変らしい

話の合う相棒と一緒にいるとだいぶ気が楽になるので、二人一組行動がいつからか主流になったそうなの。死神も複雑だな・・・

それではアルの話に戻るとしよう

アル君の相方はレナ・カーター、アルの幼馴染みにして親友であり大切な相棒なのだが・・・

「5日くらい前に急にいなくなつて、最初、レナは気分屋だからそのうち戻ってくるだろうと思つただけど、昨日いきなり『あの子』に襲われて少し・・・違うな、かなり心配になつて」
アルの言う『あの子』とは先の話に出てきたマリーという少女のことだろう。

「信用できる死神達にはレナがいなくなったことだけ伝えて、見ていないか聞いたけど誰も知らないらしくてさ、君達二人にはマリーのことも伝えておいた方が良くないかと思つてここに来ただけど」
「シリアスな時に物干しに引つかかる奴がこの世に存在するとは・・・」

しかも死神

「着地に失敗してね・・・」

「人の家のベランダを着地場所を選ぶな」

全く、迷惑この上ない

それに

「つか、あんたがぶら下がつてた所の真下に妙にデカイカバンが落ちてたんだけど・・・コレ何？」

杏が一旦家に帰ろうとしたらアパートの中庭に落つちていたらしい杏曰く「すっげー重い」とのこと

ううむ、中身が気になる・・・

一体何が入っているのか知りたい、でも本人目の前にいるし・・・

隙を見計らおう

だが、それがなかなか隙という物は作れないのだ
紗織が

「うわっ！それアルの『デスサイズ』じゃない！無くしたらどうす
んのよ！」

と言ったのである。・・・『デスサイズ』かよ

「あー忘れてた、見つけてくれてありがとうー」

「・・・いえいえ」

ちっなんだよ見るに見られないじゃん・・・チャンスを待とう

だが、チャンスという物は期待をする人間に優しいのだ

杏が

「ねえ！その中何が入っているのか気になるんだけど！めっちゃ重
かったから」

と言ったのである。杏ナイス！

「見る？」

「うんっ！ユウも気になるでしょ？」

「・・・うん」

だが翔也が苦笑いを浮かべて

「いや・・・あんまり期待はしない方が良好いぞ」

と言った。

「え？何で？気にならないの？」

とあたしは疑問に思った。杏も同じだろう

翔也には探求心がないのか？

「じゃ、開くね」

そして

カバンを開けると、なんとそこには！

一面の灰色に

鉄の匂い

それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

うのは止めとけよ」

「・・・誰が『荷物持ち』だって？その呼び方止めろって言うてるだろ」

「ん？『荷物持ち』ってなんだ？」

「アルシーノのあだ名、『デスサイズ』がカバンだから『荷物持ち』」

情けない呼び方だな

でも面白かったりWWW

杏は

「なるほど！分かりやすいなー！じゃあこれからはアルじゃなくて

『荷物持ち』と呼ぼう！」

「はあ！？」

アルの顔がこわばってる。

「じゃあ、あたしもそう呼ぼう」

「それがいいと思うぜ」

「だから布教するの止めるよ！」

「悪かったよ『荷物持ち』（にやにや）」 翔也

「ゴメンね『荷物持ち』（にこにこ）」 杏

「はいはい『荷物持ち』（わらわら）」 ? 稀

「・・・お前ら俺に喧嘩売ってんだな」

それからしばらく大乱闘が起こった・・・

部屋に物を置いて無くてよかったー、置いてたら壊れてたー・・・

マジで

そしてみんな（紗織に）倒されました。

そしてみんな（紗織に）叱られました。

ゲンコツとても痛かったです、心に響きました。

えー、気を取り直して

「まとめると、レナって人がいなくなっで、その後悪神に襲われた」
「そう言うことだね」

「……ん？待てよ、こいつさっき

「……そう言えば、悪神が出たのって「昨日の夕方」だったけ？」

「そうだけど、どうかしたのか？」

「ゆ、ユウこれって……」

昨日の夕方は、あたし達も悪神に襲われていた時間

悪神は『何か』を集団でやろうとしている。

『何か』が分からないから気味が悪い……

「奴らはチームが何かを作って行動しているってことか？」

翔也が目細めている。

何があったのか知らないアルが

「おい話が見えないんだけど、誰か説明しろよ」

と言っているので一通り話しておく……でもあたしは説明が下手だから紗織に任せた。

「昨日の夕方に 中略 と、いうわけなの分かった？」

「なるほどな」

分かってもらえたようだ。

「一体奴らは何を、何のためにしようとしてるんだ？」

「翔也、これは早急にもっと情報を得ないといけないわ」

「……90%」

「しつかりしなよ杏」

この先に待ち受けているのは黒々とした闇で、自分がそこに飲まれているような感覚がした。

二巻目 闇の中（後書き）

は、話が思ったように進まない・・・
思ったより長い話になりそうだな

三巻目 これからの日常

これで良いんだ

これで悲しまなくて良い、苦しまなくて良いんだ。
これで私は・・・きっと幸せなんだ。

あれ？

何か足りない

隣にある筈の何か足りない・・・

どこかおかしい、何故かおかしい

何かを忘れている気がする。

黒い空の下、緑の目をした少女は
誰にも気付かれずに泣いていた。

「ユウの家は？」

「いや、おかしい」

「でも他にどうしろと？」

「無理、却下」

只今、アルシーノ君の宿を決めている。

イタリアに帰るには時間が時間だしと言っているので（ちなみに夕方の六時半）……

さっきの話は結局どうにも出来ないままで保留となってしまった。

「うーん私達の家はかなり狭いし」

「ん？私達つてことは翔也と紗織つて一緒に住んでるの？」

驚愕だな……ある意味

「まあね、言っておくけど何か起こった時に動きやすいようにする

ためだから」

「いや、そりゃそうでしょうね」

違ったら違ったで嫌だよ

「翔也は？」

「俺の部屋ごちゃごちゃだしな」

「よし、じゃ片づけろ」

と言っわけで決定

「・・・なんか俺だけ扱い酷くない？」

「気のせいでしょwwww」

「wwwwって・・・」

話変わって

死神達と話していると90%と言う数値は、『悪神が襲ってくる確率』であり

『殺される確率』では無いことが分かった。

それに、悪神がたいした理由もなく雪奈を襲ったのであるとするならもう来ることもないかもしれないそうだ。

そうなれば90%と言う確率は崩れる。

10〜20%くらいに・・・

杏はそれを聞くと少し気が楽になったようだった。

普通に考えて、10〜20%というのは高い数値ではない、比べて90%の確率というとても高い、

しかしそれはあくまでも

「普通に考えると」という条件での話だ。

死神にとっては100%で初めて動揺するらしい

「死神の感覚で」という条件で90%というのはさほど高くないそうだ。

・・・杏は「どういう神経してるんだ」と呆れていた。

そりゃそうだな

安心はまだ出来ないが最悪の事態ではないらしいのでよかった。

んで、

夕飯を作つて（死神もメシは食うらしいので人数的に大変だった）今後の対策を練ることになった。

「ねえ？稀、もし襲われたら一体どうするつもり？」

「どうするって・・・」

決めていなかったな・・・どうしよう

「・・・逃げるとか？」

「おい！それが「守るよ」とか言つてた奴のセリフか！逃げてどうする！」

「う・・・」

言葉に詰まる

紗織は持つてきたカバン（黒）の中から箱を取り出した。・・・かなりデカイ50〜60センチぐらいある。

「何これ？」

「扱いに注意しなさい、武器よ」

「え？武器？」

すると翔也が

「こんな物人間に渡すなよ！危険すぎだろ！」
と言う。

危険で・・・

おそるおそる箱を開けると

刃渡りの広いナイフが・・・

「き、危険だね・・・」

「これ死神に致命傷を与えられる優れものよ」

「いやそうじゃなくて」

銃刀法違反だろっ！

捕まっちゃうよ・・・

「ちなみに人間には見えないわ」

「なんで？」

「それ、『デスサイズ』だから」

「あーですさいずかー・・・っておい沙織のは？」

「あたしの『デスサイズ』の数は7631本」

・・・分割可能なんかい

「中途半端な数だね、ナイフなんだ」

「使いやすいから」

「さいですか」

「さいです」

手に取ってみたら意外に軽い、切れ味は・・・

「翔也かアルシーノ、どっちか実験台になれ」

「いやだ、痛いのが好きじゃない」

「以下同文」

「ちっ・・・」

そんなあたしをチラツと見てから杏は沙織に、

「ねえ力になってくれるのはいいんだけどさ、もしかや奴らが来たときはどうやってみんな（死神達）を呼べばいいの？」

と質問していた。

うん、どこに住んでいるのかもわからないし、いい質問だな。

「？稀に渡した『デスサイズ』で連絡を取れるわ、通信機の代わりになるの」

「うひゃ、これ便利だねー」

どこかにスイッチでもあるのだろうか？と、いろんな角度から見て

みたが・・・

それらしきものは見つからない

みたが・・・

それらしきものは見つからない

「どうやって連絡を？」

「念じればいいの」

「・・・」

いや念じるって・・・

たとえば

（大金が手に入りますようにー）とか？・・・

普通はそう簡単に手に入らないけどネ、

宝くじでも買わないと。

（大金がほしいなら働きなさい）

頭の中で声が響いた・・・沙織の声だ。

（さ・・・沙織？・・・念じるってどういこと？）

（伝えたい思いをイメージして送るの）

なるほど、よくわからない

（今みたいにか）

（そう）

イメージして送る・・・か

「なるほど」

「理解できたみたいね」

改めてナイフを見る

ほんとに便利なものだ

「『デスサイズ』も人間には見えないんだ・・・」

「じゃあそろそろ家に帰るねーユウ、みんな」

「はぁ・・・」

「？どうかした？」

「・・・いやべつに」

今日も杏はあたしの家に泊まる気だったらしい、

昨日のように親に連絡しようとしているところを見つけて、なんと

か諦めさせた。

「また明日ー」

「あ、明日も来るの？」

「ダメなの？」

「……うるさいし」

「……たまにはあたしもゆっくりしたいから」

「えー」

と杏が頬を膨らませ

「えー」

と死神三人集がふてくされ……ってなんでだよ

「最近死人少ないしー暇だしー」

「嘘つけ、そしてあたしのところに来るな」

「あら、死人が少ないというのは本当のことよ？」

「でも、あたしのところに来るな」

「イタリアも平和だからなー」

「お前は早く帰れ」

「そんじゃまた明日ー」

という言葉を最後に杏と死神たちはすごいスピードで去っていった。どうやら明日も騒がしくなりそうだった。

「帰るか」

そんな？稀を闇に紛れ静かに見ている誰かは言った
「直し人が来た」

三巻目 これからの日常（後書き）

はいども

一週間ぶりですかねー

これからどんどん更新が遅くなってしまつかもしれませんが
私のせいではありません

・・・嘘です

これからもどっぞよろしく

四巻目 宣戦布告

騒がしい奴らが帰って、日常に静けさが戻ってきた。
賑やかなのもたまには良いものかもしれない
そう思いながら家に入る。

靴を脱ぎ

明かりを点け・・・

「こんにちはーお邪魔していまーす。」

「・・・。」

そこには栗色の髪で緑色の瞳をした少女がいた。
絶句・・・

「それにしても先ほどの皆さんの五月蠅さは尋常じゃありませんで
したねーアハハ」

愛らしく笑うよくわからない『少女』

何とか声を絞り出して聞いた。

「あ、あんたは？誰なの？」

すると少女は

きよとんとして、それから「ああ」と言っただけ・・・

「申し送れましたねー私は

悪神、レナ・カーターと申します。」

「レナ・・・カーター!?!」

それは、アルシーノの相棒の名前だったはず……
じゃあこの少女がそうだと言っただろうか？

だが彼女は今自分のことを『悪神』と呼んだ。

「私を知っているんですか？」

驚きを隠せない私を見て首を傾げるレナ

「悪神って……どういうこと……」

落ち着けあたし……取り乱さずに冷静に……

一回深呼吸をして

「何しにきたの？」

警戒しながら聞いた。

レナは「そうでした忘れてました！」と言っ

「今日は私、悪神の代表としてあなた方4人に宣戦布告を申し込みに来ました」

「宣戦布告って」

何が言いたいんだ

「あなた達……特に「あなたの存在は危険すぎる」悪神にとって邪魔でしかないのです」

「あたしが？なんで……」

「あなたの力は強大で恐ろしい、あなた自身はまだ使いこなせていないし……気がついてもないいけないけどね」

あたしの力？……

それに『あなた方4人』って

あたし、杏、沙織、翔也、アルシーノ……5人じゃないの？

「何が言いたいなの？」

そう聞きながら『デスサイズ』の入っている箱の近くに移動する。

「別に、いらぬ芽は早いうちに刈りとってしまおうというだけです。」

「芽……」

「ガルドは間違えたみたいですがねー」

「っ！」

ガルドって、あたし達を・・・雪奈を襲った悪神！

『悪神ガルド・ラーベス、規定違反及びその他諸々で連行します。』
沙織がそんなことを言っていた気がする。

「全くとんだメイワクですよ」

と、レナが座ったまま背伸びをしてあくびをしている間に

『デスサイズ』を手に取った。『デスサイズ』を持っている手をレナの死角にまわす。

(沙織沙織沙織イーーーーー)

頭の中で呼びかける

そのとき

(何?・・・?稀?)

と声が聞こえた。

(・・・助けて)

そう、一言だけ送ることができた。

しかしそれは一言だけしか送れなかったという意味だ・・・

「危ないものを持たないでくださいよー」

死角といってもナイフの大きさは5〜60センチ・・・隠れていなかったのだ。

「怖いじゃないですかー」と言いながらレナは手を後ろに回し、銃を二丁取り出した。

「まあ、あなたはここで死にますけど」

弾丸が放たれた。

それより少し前の時間

「助けてって言ったの」

『デスサイズ』でのあの一言は沙織にしっかりと届いていた。

「行ったほうが良さそうだな」

「・・・いやな予感がする・・・。」

アルシーノは何か考えるように眉間にしわを寄せている。

「とりあえず行きましょう」

沙織がそう言って

三人は？稀の家へ行くことになった。

「やるわねー」

笑顔で銃を撃ちまくる少女・・・レナは呆れたように苦笑いを浮かべながら言った。

「それ普通の人間にはできませんよー」

対する？稀はゼエハア言いながら、レナをにらんでいる。

？稀が行った事は《弾丸を16発全てナイフで弾く》ということだった。

聞いただけでは「大した事ない」という輩もいるのだろうが、そんなことはない

銃がナイフに当たればその弾丸の威力がモロで体に伝わる。

沙織の『デスサイズ』だからなのだろうかエネルギーを少しは抑えてくれているようだ。

でもきついことに変わりはない。

16発ともなれば化け物だ、

「っていうか、どうして弾丸の来る位置がわかるんですか？あり得ませんよ普通に考えて」

「簡単だよ」

うんざりしたような口調で声はかすれているが？稀は言った。

「あんたがあたしに銃を向けて、狙いが定まって、あんたが引き金を引くまで1秒ある。1秒あれば銃口の向きからどこに弾が来るかぐらい予測できるでしょうに」

口をポカンと開けてレナは信じられないとでも言うかのように首を振る。

「あなたは・・・そんなあり得ないことを・・・どうやって」

結論から言つと、学年トップレベルの秀才をなめるな・・・というわけだ。

とそのとき、

この二人のバトルは終わりを迎えた。

死神達が来たのだ。

四巻目 宣戦布告（後書き）

うひゃー

1日に二話出しちゃいましたWWW
分けわからなくなってますな

（特に銃のシーン）

これからもよろしくお願いしマース

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9579x/>

ゼンマイ仕掛ケノ人間達

2011年12月17日23時53分発行